

月の花挽歌 ～10. 月山^{がつざん}～

10-8

奈美恵はすっかり若女将然としていて、通りすがりなら、まったくわからなかった。

幼少期から使っていた2階の東側にある突き当りの部屋へ、奈美恵に手伝ってもらい荷物を運び入れた。

程好く暖房が効いている6畳の部屋は、義母の気配りのおかげで、いつ帰省しても変わらず待っていてくれた。

近頃は、ホテルや旅館で年越しをする家族が増えているらしく、旅館『D』も同様だったので、奈美恵に現場に戻るように促した。

独りになってしまうと、近くを寒河江川が流れる昔ながらの生家は、その広さ故に静まり返っていた。

真紀は一階の仏間に行くと、3日前に『フラワーベッド』で作ってもらった仏花を仏壇に供えると合掌して無沙汰を詫びた。

58歳の時に、くも膜下出血で早死した父の朝雄は、仙台の大学を卒業後、大手ゼネコンの東北支店で営業マンをしていたが、入社2年目、番頭夫婦に任せていた旅館『D』の経営が思わしくなくなり、紆余曲折を経て六代目を継ぐことになった。

学生の頃の朝雄は大学のチェスサークルでは飽き足らず、国際チェス連盟公認の『仙台チェスクラブ』に入会するほどチェスの魅力に引き込まれていた。

やむを得ず家業を継ぐことになり、若女将として申し分のない嫁ももらい、経営を軌道に乗せると、眠らせていた血が騒ぎだし、暇を見つけては高速で1時間で行ける『仙台チェスクラブ』へ顔を出すようになった。

幼稚園の頃から愛娘の頭の良さを見抜いていた父は、チェスの手解きをするとともに、『仙台チェスクラブ』へも連れていった。

チェス駒のフォルムとルールに興味を持った真紀は、みるみるうちに上達した。

薄暮の迫る仏間は静謐としていた。

真紀の脳裏に躰には厳しかった母の面影が過ると、すぐに父の穏やかな表情が立ち現れて、チェス盤を前に沈思黙考している。

真紀が中学1年の夏休みに月山の夏スキーから帰ってくると、井戸で冷やしておいた西瓜を切ってくれた父が、いつもと違う空気感でチェスを所望してきた。

対局の終盤になったところで、「再婚しても構わないかな……」と父はクイーンの駒を持ったまま、真紀を案じるような面差しでボソツと言った。

「……お父さんの好きにしてください」と察しがいい真紀はさらりと答えてから、クイーンに向かってウインクをした。

「ありがとう。お母さんの三回忌が済んでからにしたいと思っている」

その夏の日のチェスは、娘が初めて父に勝った感慨深い日となった。